居場所がないメダカたち

さいたま市立大砂土小学校　四年
石川 倫

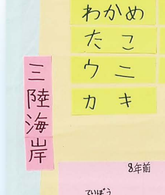
ぼくの自宅にはビオトープがある。昨年岡山県で捕まえたメダカの卵を飛行機の機内に持ちこみ、大事に持って帰ったのが始まりだ。

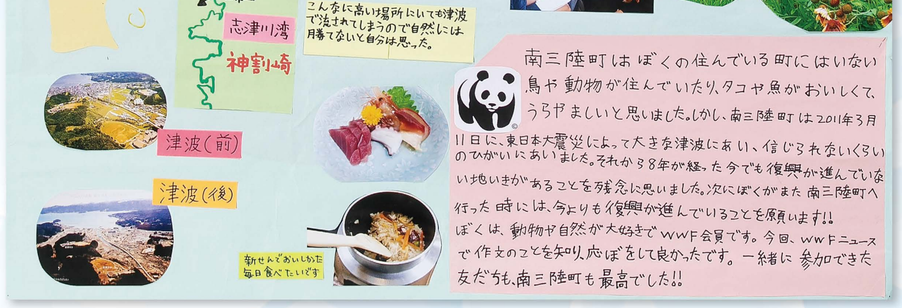
メダカの卵は中が黒くなり、動いているのが見えるようになった。尾は卵からでているのに、頭が出てこないメダカは針を使って卵から出してあげたりした。ぼくにとって可愛いメダカなのだ。だからこそ、最初は室内飼育をしようと思っていたが、室内だとかわいそうなので逃がしてあげようと思った。でも困った。用水路やきれいな川が近所にないのだ。そこで家族と一緒に庭にビオトープを作ることにした。赤玉土やハス・ホテイアオイを入れると、一週間ほどで水がすき通ったビオトープが完成した。庭にいた赤ダニを、指でメダカにあげてみると喜んで食べてくれた。

その事を一緒に住んでいるおじいちゃんに話すと、昔はぼくの家の周りには沢山の畑や田んぼがあり、ザリガニつりをしたり、夏になると蛙の声がうるさいくらいに鳴いていたり、蛍が飛んでいたことを教えてくれた。今は多くの建物が建ってしまい、田んぼや畑はない。新しくぼくの町に引っ越してくる人も多いが、ぼくと同じで昔は自然が沢山あった場所だとは想像すら出来ないと思う。メダカが住める場所はどこにあるのだろう。蛙やザリガニはどこへ消えてしまったのだろう。考えれば考えるほど本当に不思議に思う。

ストップ地球温暖化とよく聞くが、ぼくはもっと身近な環境や生き物の事を考えてもらいたい。人間の都合で生態系をこわしてはいけないと思うのだ。メダカは小さい生き物だけれど、人間と同じ地球上の生き物だ。それならば、人間の都合で考えるのではなく、生き物と一緒にくらしていける方法を一人一人が考えていかなければいけないと思う。

今年メダカが卵を産んだので新たにビオトープを作った。でも、ビオトープがふえることよりも沢山のメダカをきれいな川や用水路に放してあげたい。それがぼくの夢だ。





大きく育て、ムラサキシキブ

つくば市立竹園東小学校　四年
今泉 和夏

三年生の時、つくば山で小さな木を見つけて、植木ばちに植える会に行きました。わたしはムラサキシキブの木に決めました。大すきなむらさき色の名前だし、女の人みたいでいいな、と思ったからです。わたしは、植木ばちに、木と太陽の絵をかいて、木を植えて持ち帰りました。日のあたる所において、大きくなるといいな、と思って毎日水をあげました。ところが、木は三週間ぐらいで、葉がまいもなくなって、曲がってぼうみたいになってしまったのです。水をあげてみたけど、かれてしまいました。自ぜんの森とはちがう場所だからかれてしまったのかもしれません。わたしはがっかりして、悲しくなりました。

先週、家族とあたご山に植じゅ祭に行きました。なえ木の中に、ムラサキシキブがあったので、わたしはうれしくて、心をこめて植えました。はんの先生が、木が大きくなるには五十年かかると言ったので、びっくりしました。そして、先生は、森はへっているから、木や森を大切にしようと話してくれました。

次の日に図書館で調べると、日本の七わりが森で、このまま世界中で木を切りつづけると、森がなくなってしまうということが分かりました。本当にそうなるのは、いやです。わたしが植えたムラサキシキブも、前のときみたいに、かれてしまうかもしれません。

森を守るためには、どうすればいいか考えました。木を切りすぎない。切るときは必要な分だけにする。木から作られる物を大切に使う。紙やえん筆もむだ使いしない。人間が木を一本も切らないのはできないけど、森のために、人間が、少しがまんをすることはできる、とわたしは思います。人間は森を大切にし、森は動物や人を助けて、みんなが助け合う未来になるといいな、と思います。

わたしの植えたムラサキシキブに、五十年後、また会いたいです。

◆この作文&体験記録集は、カスミのホームページでもご覧いただけます。

http://www.kasumi.co.jp/